

The Sinfonietta ザ・シンフォニエッタ 第37回演奏会 37th Concert



指揮・ヴァイオリン
篠崎史紀

© 井村重人

2025年 6月 15日 (日)

熊本県立劇場コンサートホール

開場13:45 開演14:30

ゲストコンサートミストレス 船津 真美子



主催：ザ・シンフォニエッタ

後援：熊本県教育委員会 熊本市教育委員会 NHK熊本放送局 熊本日日新聞社 RKK TKU KKT KAB FM791 FMK

公式ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>

※4歳未満のお子様の入場はご遠慮ください

(小さなお子様のご鑑賞は他のお客様のご迷惑にならないようご配慮ください。親子室もございますのでご相談ください)

Profile



ヴァイオリン 篠崎 史紀 *Fuminori Maro Shinozaki*

北九州市出身。愛称 "まろ"。3歳より父篠崎永育、母美樹の手ほどきを受け、1981年ウィーン市立音楽院に入学。翌年コンツェルト・ハウスでコンサート・デビューを飾る。その演奏は、「信頼性のあるテクニック、遊び心もある音楽性」（ヴィーナーツァイトUNG紙）、「真珠を転がすような丸く鮮やかな音色、魅惑的な音楽性」（フォルクスシュティンメ紙）と各メディア紙から称賛される。完璧なテクニックとパッション溢れる美音は他の追随を許さない。その後ヨーロッパの主要なコンクールで数々の受賞を果たしヨーロッパを中心にソロ、室内楽と幅広く活動。



88年帰国後、群馬交響楽団、読売日本交響楽団のコンサートマスターを経て、97年NHK交響楽団のコンサートマスターに就任。以来"N響の顔"として国内外で活躍する。ヨーロッパ公演では、「コンサートマスターの篠崎は言葉にならないくらい神がかった（イギリス紙）」「兵站学と調教が芸術へと進化し、コンサートマスターの篠崎「マロ」史紀のカリスマ的な姿は、銀白の鎧をまとった戦士のようにでもあり、全てを統括していた（イギリス紙のThe Classical Source）」と評される。2023年NHK交響楽団特別コンサートマスターに就任し、今年3月にN響を退団。30年近くに渡りN響コンサートマスターを務めた。

演奏会やオーケストラの企画も自ら行い、2004年よりスタートした銀座・王子ホールと、"まろ"プロデュースによる共同企画『MAROワールド』は、チケットが発売初日に数十分で完売という人気シリーズである。毎回一人の作曲家を取り上げて行われるこのシリーズから弦楽合奏団「マロカンパニー」が結成され、指揮者無し的大型室内楽「マロオケ(Meister Art Romantiker Orchester)」にまで発展している。これらの功績により、「2020年度第33回ミュージック・ペンクラブ音楽賞」にて『MAROワールド』がクラシック室内楽・合唱部門賞を受賞。

その他、79年史上最年少で北九州市民文化賞、2001年福岡県文化賞、2014年第34回NHK交響楽団「有馬賞」受賞。

後進の育成にも力を注ぎ、1996年には東京ジュニアオーケストラを立ち上げる、また『楽興の時～室内楽セミナー&演奏会～』では指導及び共演を行っている。2019年ヴァイオリニストとしては日本人として初めてリスト音楽院より招聘されマスタークラスの指導を行う。

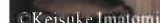
九州交響楽団ミュージックアドバイザー、福山リーデンローズ音楽大使及び北九州文化大使。

WHO国際医学アカデミー・ライフハーモニーサイエンス評議会議員。

使用楽器は1727年製ストラディバリウス(株)ミュージック・プラザより貸与。

ゲストコンサートミストレス 船津 真美子 *Mamiko Funatsu*

5歳よりドイツにてヴァイオリンを始める。相愛高校音楽科、相愛大学音楽学部卒業、研究生修了。第6回日本クラシック音楽コンクール全国大会入選。大阪交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団他、日本各地のオーケストラや、タイ・バンコク交響楽団にてオーケストラ客演奏者として演奏。バンコクや熊本にてリサイタルを開催。第4回熊本アートフェスティヴォ!聴察賞受賞。平成音楽大学講師、必由館高校非常勤講師。



管弦楽 ザ・シンフォニエッタ *The Sinfonietta*

1986年に結成されたアマチュア・オーケストラ。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典派の曲を中心としながら、ロマン派、近代の曲なども演奏している。アンサンブルを楽しむため、小編成の特性を活かした選曲を行い、時間をかけた丁寧な音楽作りを目指している。これまでに共演した主な音楽家は、指揮者では本名徹二、山下一史、藤崎凡、久保田悠太香、松元宏康、中井章徳、竹内健人などの各氏、ソリストでは安永徹 (Vn)、篠崎史紀 (Vn)、O.ボルヴィツキー (Vc)、若林颯 (Pf)、合志知子 (Pf)、吉田秀晃 (Pf)、青柳晋 (Pf)、鈴木理恵子 (Vn)、藤森亮一 (Vc)、龍野しずく (Vc)、田尻大喜 (Tp)、柴田恵奈 (Vn)、大村友樹 (Fl) などの各氏で、すばらしい指導者・共演者に恵まれ充実した活動をしている。2011年に若林颯氏の弾き振りでピアノ協奏曲3曲を一夜で演奏。2012年には、山下一史氏指揮のもと、一般募集の合唱団、県内外の歌手の方々と共演し歌劇「カルメン」の演奏会形式に挑戦して好評を得た。2017年には、ソリストに日本を代表するヴァイオリニストの鈴木理恵子氏とNHK交響楽団首席チェリスト藤森亮一氏を招き、ブラームスのドッペルコンチェルトを共演。第30回の節目にふさわしい演奏会となった。2018年には指揮に松元宏康氏を招き、約200年前の演奏法など新しい試みに挑戦。昨年10月には若林颯氏を再びソリストに迎え好評を得た。

曲目インタビュー～指揮・ヴァイオリン 篠崎史紀(マロ)さんとの座談会 ～

—交響曲に「パリ」・「イタリア」を選ばれた理由はなんですか？

マロにとって、天才の作曲家は、シューベルト・メンデルスゾーン・モーツァルトの3人。この3人の作曲家は、音楽史の中で語られないといけない人。感覚だけで曲を書いたのに素晴らしいものを残した3人のうち2人の作曲家を選んだ感じ。メンデルスゾーンとモーツァルトは、若い時からすごく完璧な曲を書いている。また、メンデルスゾーンは、世の中がロマン派に転換しようとしている時に、原点回帰みたいなことを考えて元に戻そうとする。この2人がいなかったら先には進んでいない。そういう意味では、世の中を先に進めた人達。

—交響曲「パリ」についてですが、当時のフランスはどんなものだったのでしょうか？

ウィーンと同じで、ものすごく憧れの地だったのは間違いない。歴史上、いろんなものが育っていった場所はたくさんあるけど、パリは、その中でも独自の文化をものすごく持っていて花開く場所であった。だから、モーツァルトや、その後の作曲家ショパン・ストラヴィンスキーたちも、みんな憧れてそこへ行く。ウィーンとパリはある意味、憧れの地であるのは間違いない。人間のエネルギーの中で、すごく大事なのが、「好奇心」・「憧れ」の2大エネルギーで、この2つがないと絶対先に進めない。モーツァルトが、それを求めてその土地に行ったのは、もしかすると物凄い不思議な力を持った何かが存在したのかもしれない。あの時代、パリの王朝に認められたというのは、1つの大きなステップだったのは間違いない。

—「パリ」を作曲した同じ頃に、母親が亡くなっていますが、パリはあまり悲しい感じがしませんね。パリはどのような想いで作曲されたものなのでしょうか？

彼の中で、母親の思い出は、きっと楽しいものだったんじゃないかな。誰かが亡くなって、悲しいのは当たり前だけど、悲しいだけではないからね。それをなんとか表現したいと思ったのかもしれないし、それは本人に聞いてみないとわからない。ただ、そういう想いだけで作曲するわけではないと思う。一つ不思議に感じるのは、パリの曲だけ、編成に管楽器を全部使ったのはなんでなんだろうと。今の時代に、自分にしかできない何かをやりたいと考えていた矢先に書いた曲なのかなと思う。何か新しいことを生み出そうとする時、人間はすごいエネルギーを持っているし、そういった想いが詰まった曲だと思うと、ザ・シンフォニエッタにぴったりなんじゃないかな。

—音楽と言語は密接な関係にあると言われます。今回の交響曲「パリ」・「イタリア」は、「フランス語」・「イタリア語」に影響されているのでしょうか？

当時、イタリア語はそうとう影響している。イタリア語は、宮廷音楽家として一番大事な言語。言語が、なぜ音型とリズムに影響するかというと、シンフォニー・コンチェルトは音楽の中心であつたけれど、もっと中心にあつたのが「歌」。例えば、第九の中国語・英語・日本語版は聴いたことあるかもしれないけど、やっぱり変に聴こえる。要するに、音楽のリズムと言語というのは、ものすごく密接にあるというのがまず一つ。あと、「舞曲」は、間違いなくその土地のリズム・形態を持っていて、その土地の人間にしかわからない不思議な魔力がある。

—ザ・シンフォニエッタは、29年前に「イタリア」をマロさんと共演させて頂いています。その当時と曲の印象等、何か変わられたことはありますか？

クラシック音楽は、時代と共に変化する。楽譜が少しずつ研究されて改定されているけど、実は根本的なところは何も変わってない。だけど、演奏法は時代と共に変わってきている。100年前のイタリアの録音と、今の録音はやり方がだいぶ違う。メンデルスゾーンが指定したテンポは、本当は速すぎて弾けないけど、最近の演奏家は、その作曲家が指定したテンポでベートーヴェンの曲を弾いたりもする。でも作曲家が、実際にその演奏を聞いたら、こんなのありえないと思うのではないかな。だから、そういうのを考えると根本的には何も変わってないと思うね。そしたら、何が変わったかということ、ザ・シンフォニエッタのメンバーの年齢が変わって、それによってのんびりなテンポに落ちているかもしれないけど(笑)。でもそのテンポは、音楽の方向性を決めていく上で、みんながコミュニケーションをとるための題材でしかない。そこから新しいもの、今でしかできないものを作っていく、その再生能力の強さをみんなで感じる事が、今後の中で大事な事。だから、当時と比べてどうだったかと考える必要はないと思う。今できることをみんなでやっていくことの方が大事。

—モーツァルトのコンチェルトは、3番～5番が有名ですが、この1番を選ばれたのはどうしてでしょうか？

モーツァルトの1番は、彼が若い時にザルツブルグ様式を勉強して、書いてみたいと思って書いた曲。2番はパリ様式を勉強して、書いてみたいと思って書いた曲。3番～5番は、親父から、そろそろバイオリンコンチェルトを書けと言われて嫌々書いたもの。1番は、その中でもっとも未来を感じるモーツァルトの原点だから、すごく良いんじゃないかなと思う。B-Durは、すごく弾きにくいけど、彼の気持ちの中には、「希望」がいっぱい詰まっている。だからそういう意味で派手ではないけど、ザ・シンフォニエッタのみんなとまた一緒に会うのに、「希望」という意味でふさわしいんじゃないか。あとは、世の中の情勢であつたり、自分がこの年齢になって「希望」をもってまた歩こうかなという気持ちであつたり。

—アマチュアオーケストラが大切にすべきことはなんでしょう？

みんなアマチュアとプロって分けるけど、実は作曲家のもとでは平等。作曲家という神がいて、それより偉い人は1人もいない。ベートーヴェンとかモーツァルトとか作曲家は、奏者に対して違うものを要求してはなく、同じことを要求している。それをみんなで体験しようというのがまず大事。

—アマチュアオーケストラと共演することにおいて、何か気を付けられていることはありますか？

音楽と接することに関しては、対等だと思っている。できる技術は色々あるかもしれないけど、音楽を愛する気持ちは同じ。難しい専門的なことよりも、もっと大事なことは、楽譜に書いていることが何かを推測する楽しさをみんなで共有すること。楽譜に書いている情報は作曲家が考えている億万分の一しかなくて、単なる記号でしかない。その記号に対して想像できる可能性をどこまで考えるかが一番大事。例えば1stVnが16人いた場合、どのフィンガリング、どのボーイングを使うかで表現方法が、天と地の差になる。また、それを使える人が何人いて、最大公約数としてどういうふうにやっていくか。その音が持つ意味に対して出てくるフレーズ・音色を1番良いものをチョイスしないとイケない。楽器をやる人はみんな同じで、それを決めるというのが仕事で作曲家に対しての誠意。それをやる面白さ、謎解きがこのクラシックの面白さを増大する。

—今回の3曲で、これまでの印象に残っている演奏会はありますか？

古楽奏法が1998年ぐらいから2003年の楽譜改定のあたりで一時的に流行った。古楽奏法も素晴らしいんだけど、N響時代に、モーツァルトのパリを弾いていた時に、そうじゃない演奏も素晴らしいと感じた。N響も一時期、古楽奏法に近い指揮者を呼んだりしていたんだけど、古楽器でないと表現できないことがいっぱいある。それを真似ることはできるんだけど、それは真似であって本物ではない。指揮者によっては、もっとロマンチックにという指揮者もいるし、この好みは色々あればあるほど良いなと思っている。世の中に色んな奏法をする演奏家がたくさんいて、それが混在することの素晴らしさはあるんだろうなと。中には古典だからこうじゃないといけなと言ったりする人もいるけど、それにこだわってしまうと、その同じ考え方をもった仲間やらないと絶対に上手くいかない。色々な奏者がいるオーケストラの特性をそのまま生かした、一番ナチュラルにみんなが腑に落ちる奏法を決めることが大切だと感じたことがある。

—お客さんに対して、ここは特に聴いて感じて見て欲しいところなどありますか？

よくここは聴きどころとか言うんだけど、聴衆に対して、そこを聴いてほしいではなくて、何かを受けとってほしいと感じる。自分が演奏を聴きに行くときには、これって素敵だなという場所を探しに行くような感じ。今回の曲で聴きどころはいっぱいあるよね。でもそうではなくて、演奏会は、与える側と与えられる側ではなく、みんなで作る空間なんだよね。その作る空間をみんなでどうやって楽しんでくれるかが一番大事。

Program

モーツァルト／交響曲第31番 ニ長調「パリ」K.297

第1楽章 Allegro assai

第2楽章 Andante

第3楽章 Allegro

モーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第1番 変ロ長調K.207

第1楽章 Allegro moderato

第2楽章 Adagio

第3楽章 Presto

～ 休 憩 ～

メンデルスゾーン／交響曲第4番 イ長調「イタリア」Op. 90

第1楽章 Allegro vivace

第2楽章 Andante con moto

第3楽章 con moto moderato

第4楽章 saltarello : Presto

♪ オーケストラコンサート豆知識 ♪

○ 拍手はいつするの？

クラシック音楽の曲には「楽章」がある場合があります。「楽章」とは大きな1曲がいくつかに分かれているものです。演奏が始まり1つの楽章が、「…ジャン! ♪」と終わると、「曲が終わったのかな?」と思われるかもしれませんが、しかし、曲はまだ終わりではありません。なので、拍手はちょっと待ちましょう。

今回のプログラムでは、3曲とも3～4つの楽章に分かれており、それぞれ違う雰囲気を持っています。「物語が第1話から第4話まである。」みたいなものです。物語の途中で「あ～、面白かった♪パチパチ…」とはならないですね。「次はどうなるんだろう? ワクワク…」という気持ちで、次の展開を待ちましょう。

そして、全曲演奏し終わって演奏が良かったと思ったら、惜しめない拍手を送りましょう!

ごあいさつ

本日はザ・シンフォニエッタ第37回演奏会にお越しいただきありがとうございます。

“Sinfonietta”とは「小さなオーケストラ」という意味です。1986年の創立以来、主に小編成の楽曲に取り組み、時間はかかっても良い演奏会となるよう、じっくり練習することを心がけて参りました。これまで、すてきな楽曲、すばらしい音楽家、楽しいメンバーに恵まれて活動してきました。そして、演奏会にお越しいただくお客様と豊かな時間を共有できることを何よりの喜びと感じています。これまで当団をご支援いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

今回、共演となる篠崎史紀氏は、音楽が好きなら誰でも知っているヴァイオリニストです。NHK交響楽団のコンサートマスターを30年に渡って務められ、今年の3月に特別コンサートマスターを退任されました。当団とは過去に1993年、1997年、2010年に共演の実績があり、今回は4回目となります。日本を代表するプロオーケストラを率いてきたコンサートマスターが導く音楽の素晴らしさを感じていただけるよう、誠意を込めて演奏したいと思います。

ゲストコンサートミストレスの船津真美子氏には第30回演奏会からコンミスを務めていただいております。当団にとっては欠かすことのできない存在です。今回も細やかで的確なアドバイスでオーケストラの牽引役を担っていただきました。トレーナーの蓮沼昇氏には、練習開始当初の手探り状態から、詳細な解説と妥協のない指導で演奏を形にいただきました。御二方とも大変心強い存在です。特別アドバイザーである坂本一生氏には、今回の篠崎氏との共演にあたり、様々な調整、手続きなどのお力添えをいただきました。本演奏会を開催するにあたり、ご助力いただいた全ての方に厚く御礼申し上げます。

それでは、名曲の魅力を最後までお楽しみください!

